

平成29年度 香川大学危機管理シンポジウム
多発する自然災害から命を守る防災教育のあり方

日時：平成29年12月4日（月）13：00～16：48

場所：サンポート高松4階 第1小ホール

主催：香川大学四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構

共催：（公社）土木学会四国支部香川地区

土木学会安全問題研究委員会

後援：国土交通省四国地方整備局、香川県、高松市

四国経済連合会、（公社）日本技術士会四国本部

香川県防災士会、かがわ自主防連絡協議会

四国5大学連携防災・減災教育研究協議会

NHK高松放送局、RNC西日本放送

TSCテレビせとうち、KSB瀬戸内海放送

四国新聞社

内容：

13:00～13:05 開会挨拶

主催者挨拶 吉田秀典 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構長 副学長

- ・受付業務に従事していたため、メモ取りできていません。

13:05～13:20 来賓挨拶

13:05～13:12 野崎智文 国土交通省四国地方整備局企画部長

- ・命を守る 四国地方整備局でも教育委員会のみなさまと連携。四万十市の八束小学校で防災教育の試行授業、丸亀市飯野小学校でも試行授業。来年度には愛媛県、徳島県も入り12校で試行授業。
- ・避難行動、危険の予知、被害予測に正しい理解が進むよう取り組んでいく。
- ・今日のシンポジウムでは多発する自然災害、それへの備えについて、できるだけ多くの人にどう伝えていくか議論されると思う。
- ・機構のますますの発展、みなさまにとって実り多いシンポジウムとなりますよう。

13:12～13:17 山田恵三 香川県危機管理総局長

- ・近年、局地的な豪雨や台風による災害が全国各地で起きている。
- ・災害はいつどこで起こるかわからない。
- ・発生確率が低かった熊本で直下型地震が発生するなど、香川県でも直下型、海溝型の地震がいつ起きてもおかしくない。
- ・香川県ではハード、ソフト両面から減災対策を行っているが、大規模災害になるほど行政の公助は難しく、自分の命は自分で守る、そのために防災教育は重要。
- ・香川県国土強靱化地域計画 目標実現のためには本県における被害を縮減し、連携が重要。
- ・国や他県との連携強化を進めていくので、みなさまのご協力を。
- ・香川県内で自転車が関係する事故、車両単独事故が多発。「命を守ろう、交通ルールを守ろう」のスローガンのもと、交通ルール、交通マナーの実践を。
- ・機構の発展と、みなさまのご健勝、ご活躍を祈念します。



13:17~13:22 片山智規 高松市総局長

- ・九州北部豪雨 香川県内では、昨年6月には短期間豪雨で島嶼部のため池が決壊、10月の台風21号では、住民への避難指示を発令するなど対応、支援を行ってきたところ。
- ・防災への学びが大変重要と思っている。
- ・高松市では香川大学と連携し防災士養成講座、防災士と連携した研修など防災士の養成、防災マイカフェによる市民への取組など行っている。
- ・地域住民の防災への意識や防災力が高まっていると感じている。
- ・高松市危機管理センターが完成し、防災の学習に供せるスペースが開設され、さらなる防災意識の高まりに期待している。
- ・機構の発展と、みなさまのご健勝とご活躍を祈念します。

13:23~13:57 機構の活動状況報告

○報告者：金田義行 地域強靱化研究センター長 特任教授

○機構とは

◇レジリエンスサイエンス

◇7つの部門

- ・先端教育プログラム開発部門
- ・人材教育部門
- ・減災基礎研究部門
- ・大学間連携部門
- ・地域連携部門
- ・減災応用研究部門
- ・国際連携部門

◇教員の構成

- ・専任教員、併任教員、全国各地の客員教授

○人材育成部門

- ・VRによる想定外災害再現・教育訓練
- ・地域防災リーダーの育成
- ・学校防災アドバイザー 教育機関での防災
- ・健康危機管理の専門家 メンタルヘルスプロジェクトの支援
- ・四国防災・危機管理プログラム 防災危機管理の専門家の育成

○地域連携部門

- ・香川地域継続首長会議
- ・香川地域継続検討協議会 いかに継続をするか、事前の備え
- ・まちなかカフェ 広く開かれた減災、防災教育
- ・突発性災害被害調査 被災地域との連携
- ・学会活動
- ・企業との連携

◇四国という視点で、巨大な地震に対して四国全体でどう連携し被害を軽減していくか

- ・4県と国立5大学の連携

- ・リアルタイム情報をどう活用するかの訓練 11月12日に坂出で訓練
- ・いかに迅速、効果的に道路啓開をしていくか 地域影響分析（DIA）システム

○四国地域の災害に強い地域産業のあり方

- ・「地域経済循環率」を用いた地域の自立度を確認

○減災応用研究部門

- ・特微量の抽出 → 予測 → 制御手法開発を目指す
- ・寄付研究部門 海外の研究者も巻き込んで

○大学間連携

- ・熊本大学との強い連携
- ・他県大学との人的なネットワークの強化。
- ・大学・研究機関連携において相互補完による減災科学の推進が可能。

○国際連携部門

- ・アジア、ネパール、トルコなど 国際連携の中で、減災科学の連携

○学内危機管理

- ・災害情報の収集、発信
- ・学内BCP研修、防災訓練対応

○人材育成の課題

- ・減災教育プログラムの四国展開
- ・VRの活用（より実践的な訓練シミュレータ）
- ・人材育成の成果の評価手法？

○地域連携の課題

- ・災害の地域支援（ボランティア、被害調査等）
- ・モデル地域を設定し、災害前、災害時、災害後 → 地域強靱化計画を策定
- ・地域の歴史、地形、文化、災害史を知り、地域未来社会のイメージを共有する。

○国際連携の課題

- ・海外の大学や研究機関との協定締結は、連携の始まりであり、具体的なアクションプランを設定することが重要
- ・国際学会活動や国連機関との連携強化
- ・JICAやJSTの国際連携枠の活用
- ・人材交流等による、人的ネットワークの展開

○減災科学の課題

- ・各分野の連携と減災科学の教員セミナーなど
- ・各分野での研究深化

- ・ 四国減災コンソーシアムを通じた展開

○人口減から

- ・ イノベーション、未来四国のグランドデザインが不可欠

○今後の方針

- ・ フェーズ1 (H28~29) 香川・四国・国際対応
- ・ フェーズ2 (H30~31) 創造工学部との連携
- ・ フェーズ3 (H32~33) 国内・国際展開

○さいごに

- ・ 日本は地震・津波・火山噴火多発国であり、忘れなくてもこれらは必ず発生する。
- ・ そのため、備えの減災科学の進展、国土強靱化の推進が必要不可欠である。

13:58~15:03 「これからの防災教育 ~人を育む・未来を創る~」

○講師：慶應義塾大学 環境情報学部 准教授 大木聖子

- ・ 専門は地震学、災害情報、防災教育など
- ・ 東京大学大学院理学系研究科で博士号
- ・ カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリプス海洋学研究所にて日本学術振興会海外特別研究員
- ・ 2008年 東京大学地震研究所 助教
- ・ 2013年より現職

○はじめに

- ・ 前半は地震の話、後半は人間の話をしたい。
- ・ 世界の地震の10個に1個が日本で起きている。日本は地震国。
- ・ 「うちの地域は大丈夫」「神戸は一度起きたのでもう大丈夫」 ← 科学的に間違っている
日本はどこでも、いつ起きてもおかしくない。
- ・ この図は、最近30日間の日本の地震活動 1万7千個の地震
平均的には2万~3万個起きている。

○地震の定義は

- ・ 地震の定義は「地面が割れる」こと。
- ・ 2016年4月 熊本地震 2mのズレ
- ・ 1995年兵庫県南部地震 50kmにわたりずれた ← 香川県ほどの面積 ← この面積からマグニチュードを評価 M7
- ・ M8だと 1923年関東地震 神奈川県と千葉県南部の広がり ← 四国の2/3ほどの面積
- ・ M9 東北地方太平洋沖地震 盛岡から千葉までの広さ
- ・ ニュースに出てきた“×”は、割れ始めの点だけ
- ・ 割れが伝わる速度が秒速3km → Mの大きな地震は長く揺れている。
- ・ 揺れている時間が長ければ、大変な地震が起きていると判断できる。

○揺れの長さにも注目

- ・マグニチュードが大きいほど、強く、長く、揺れる。
- ◇立ってられないくらいの強い揺れ（震度6以上）
 - ・10～15秒くらい → M7
 - ・1分くらい → M8（津波を想定！）
 - ・3分くらい → M9（超巨大津波！）

○1万8千名をなぜ救えなかったのか

- ・14時46分に亡くなった人はほとんどいない。
- ・津波がくる30分間に何も出来なかった → 本当には地震や津波のことを考えていなかったから
- ・まちを歩いていて、地震のMや深度がわかるわけがない → **揺れの長さから、地震の規模や津波の可能性を判断して命を守る行動を**

○南海トラフ地震

	南海地震	東南海地震	東海地震
・1946年（昭和）	○	←2年後 ○	×
・1854年（安政）	○	←30時間後 ○	連動 ○
・1707年（宝永）	○	連動 ○	連動 ○

- ・必ず起こる
- ・最悪の目安として M9.1（2014年内閣府の想定）
- 香川県では震度6弱～強
- 着岸時の津波の高さが3.4m

○香川県の過去の地震被害

- ・1707 宝永地震 8.6 死者28人、倒壊929棟、五剣山の崩落
- ・1854 安政南海
- ・長尾断層 平安時代に一度活動か！？

○あなたにとって、南海トラフ巨大地震／直下型地震は何ですか？

- ・強烈な揺れで倒壊する家屋
- ・太平洋沿岸で30メートルを超える津波
- ・あいつぐ火災の発生

○中学生による防災小説の効果

- ・土佐清水市の中学生にとっての南海トラフ地震
- ・65歳以上人口が4.6%
- ・市内ほぼ全域で震度6弱以上
- ・最大津波高3.4メートル

↓

- 「市民の方々から不安やあきらめの声が寄せられており・・・」と役場の方から相談が
- ・家具を固定した率、津波警報で避難した率 あきらめている人にどう防災教育をすればいいの

か？

○浸水想定の高い地域にある学校から順に実施（5小1中）

- ・ 専門家と自治体で作ったハザードマップ vs 子どもたちが作った色鉛筆の地図
ハザードマップに父兄は集まらない。子どもたちの作ったマップに集まる。
- ・ 一住民の目を見た時に、ハザードマップにはどこに避難し家族が集まるかが書かれていない。
- ・ 誰が、どういう関係性で作ったのが重要。子どもたちが防災の表舞台に出て作った地図。

○防災教育に付き合わされている

- ・ 高台にある小学校出身の清水中学校生の発言。「防災教育に付き合わされている」
- ・ 学校が南海地震発生の（近未来の）日付と天気を発表。
- ・ その時の自分を想像しながら、自分や家族、町がどうなるかを800文字程度にまとめる。
- ・ ルール：小説は希望を持って終わること

○文化祭で発表

- ・ 緊急地震速報 バスは停車した
- ・ 大きな揺れが2分ほど続いた。
- ・ バスの運転手さんの誘導によって松尾トンネルに避難する。
- ・ トンネルで一夜を過ごすしかない。
- ・ 避難所で食事を分けてもらう。
- ・ 遠回りになるが中浜を歩くことに。
- ・ ようやく清水中学校に到着。
- ・ 行方不明者0人、死者数0人ということが伝えられるラジオの放送だった。

↓

- ・ 防災のための学習をすることなく、2時間で作文。小学校からの防災教育の知識で書き上げた。
- ・ この小説を聞いた大人は、老人は、あきらめて死ぬわけにはいけない。

○清水中学3年生の防災小説

- ・ 強い揺れでパニックになるだろう それでも机の下に隠られる身体になっている
- ・ 運転手さんとの信頼関係がある、そんな町に生きている。
- ・ 声をかけながら走って逃げる。神社の階段ではお年寄りや障害者に手助けして登る。
- ・ 津波が迫っているのに焦る様子もなく登ってくる人に、「急げ！早く！」と声をかける。
- ・ 「家崩れる前に荷物取ってくるけん」とおじさんが言うので、「帰ったらいかん」と。
- ・ 人に出来ることは何でもしていこう。
- ・ 久しぶりに家族全員そろった。こんな幸せなことはない。

- ・ 最前の判断をして行動に移すこと。
- ・ 街の人と声をかけ合って、命を守ること。
- ・ 友達や街の人みんなと助け合って生き延びること。

○小説の効果

- ・ 「偉い専門家によると、どうやら自分たちは次の津波で死ぬらしい」と決定付けられた世界観で

硬直化。

- ・いまだ語られていない物語を作り、共有する。

○未来は変えられる

- ・中学生の防災小説：「まだ」起きていない南海地震を「もう」起きたかのように語る。
- ・専門家：未来のことを今後の可能性として伝達する。

↓

どちらが未来を変えられるか

- ・校長先生の考えが中学生の防災小説を読み、安否確認と同時進行で、中学生と一緒に避難所の立ち上げをしようと考えが変わった。

○防災小説の前後での変化

- ・避難について具体的に
- ・南海地震が起きたら地域や家族がどうなるか、ということに防災学習を通して向き合った。
- ・これを通して南海地震のことを家族、地域の人たちと共有できた。

○防災教育とは

- ・テストでいう正解と、発災時にその行動をとれることは別。
- ・どんなときも、あなたの命が大事だということを伝える。
- ・家族の命も大事だから家族とも一緒に防災について考えよう、家族と約束をしよう、ということまでやる。

15:03~15:10 休憩

15:12~16:45 パネルディスカッション「命を守る防災教育の在り方」

○コーディネーター：岩原廣彦 危機管理先端教育研究センター 副センター長 特命教授

○パネリスト：茶園徹 香川県教育委員会事務局保健体育科 主任指導主事

大熊裕樹 高松市立中央小学校 教頭

花崎哲司 香川県立盲学校 教諭

金井純子 徳島大学創新教育センター 助教

萩池昌信 危機管理先端教育研究センター 特命教授

○今日の流れ

- 1) 防災教育の取組の内容の紹介
- 2) 防災教育における課題と対応
- 3) 命を守るためにしなければならないことは

<防災教育の取組の内容の紹介>

岩原：教育の現場、教育委員会、学校防災アドバイザーの立場からお話を。

茶園：香川県教育委員会の取組について

- ・東日本大震災を契機に、H24年度から学校防災アドバイザー派遣事業を実施。
- ・学校安全に関する有識者を幼稚園、小中学校に派遣。

- ・香川県内に幼稚園、小中高校、盲学校などが377校あり、146校しか参加していない。どんどん活用してほしい。
- ・H27年度から、高校生を対象としたボランティアリーダー養成講習会を実施。

大熊：小学校における防災教育

- ・前任校が栗林小学校、今は中央小学校。両校での取組を紹介する。
- ・防災訓練：避難訓練 簡易ヘルメットを使つての避難訓練
- ・防災学習授業参観：土曜日に学校、家庭、地域を巻き込んでの学習

◇「命を守る学習」とするために～事項生を高める～

- 1) 児童、教員の意識を高める
- 2) 地域、専門機関との連携 学校防災アドバイザーなど
- 3) 対応能力を高める
- 4) 振り返りの充実

◇防災学習授業参観

- ・隔年年1回 1、2年が同じ授業 学年に応じた内容で
低学年 授業：もし地震が起きたら 体験学習：非常食、非常携帯品を作ろう
中学年 授業：
高学年 授業：避難所で 体験学習：AED体験

花崎：盲学校のチャレンジと苦悩

- ・生徒の、教員の、家庭の、地域のよりどころとなる（なれる）取り組み
- ・1、500人の収容計画に700食の備蓄食糧
- ・生徒の実態：本人ではなく、大人からの過度な制限「危ないからやってはいけない」
誰かがやってくれるまで待つ → やってみて、自分で出来ること、役に立てることがわかった

◇災害対応能力向上

- ・
- ・楽しく役に立つ防災教育 アクティブ・ラーニング
- ・津波を五感で体験してもらう
- ・シェイクアウト・プラスワン
- ・257校のうち35%しか備蓄倉庫がない
- ・教えられない教員をどうするか。

金井：遠隔地での防災士養成

- ・H19～27年度までは徳島大学1会場で養成講座。
- ・H28年度から美馬市と海陽町にサテライト会場を設置。
沿岸部などニーズのあるところに教育を展開していく。
- ・四国防災・危機管理プログラム：避難所運営の演習、障害者、高齢者などとの対応の練習に
- ・東日本大震災 2倍 障害者の死亡率は一般者の2倍
- ・障害者グループホームの避難訓練

萩池：医療機関における防災教育

- ・20年間外科医でいた。危機管理プログラムに携わり、
- ・最大の目的は「命を守ること」
- ・防災教育は手段であって目的ではない。
- ・医療現場では毎日命と向き合っている。

◇非医療系の対象者

- ・仕事が忙しくて、会社の健康診断を受けていない。
- ・少し症状があるが仕事優先でがんばる。ついにある日、病院に行くと進行ガンで余命6ヶ月。
- ・健康問題は最愛の危機管理

◇医療系の対象者

- ・医療は毎日が危機管理
- ・医療安全の問題はリスクコミュニケーション

◇防災教育は特別なモノではない

- ・日常の延長上に災害対応があり、日常生活と災害対応はリンクしていることを意識すると災害対応もスムーズに進む。

<防災教育における課題と対応>

岩原：

- ・防災を教育できる教員がどれだけいるのか
- ・災害弱者が取り残され、防災のフォローが十分に出来ていない。
- ・日常生活の中から防災に取り組むアプローチの話を。

大熊：

- ・自分ごととして実感させることを心がけている。
- ・何度も避難訓練を出来ないなので、一回の訓練の質を高める。
- ・地域の自主防災組織、専門家の方にも来てもらい、常にアドバイス、連携を。
- ・ガラスの危険箇所、避難経路の変更などで、リアルさ、教員の対応能力も高まる。

◇保護者の意識を高めることも大事

- ・子どもたちや高齢者は意識が高いが、保護者の意識が・・・
子どもから保護者に伝える。
- ・学校を核にして地域のコミュニティのつながりを深める。

岩原：地域特性としてどのような災害のある場所ですか？

大熊：建物の被害があるところ。ため池はあるが水の被害はないところ。津波が来ない地域だが、子どもたちは将来どこで暮らすかわからないので、津波にも備えて訓練をしている。

岩原：教員、保護者、児童の意識を高める、地域連携という意味で盲学校での取り組みは？

花崎：知識はあるけれど、体験していないと動けないよね。何かが起きないと法律が間に合わない
国、ハッピーエンドのマスコミ、開かれた学校、命を守ろう 池田小学校の事件から再び学校

は閉ざされた。 → マニュアル化された学校運営、画一的な運営、地域や児童の特性に合っていない。

- ・ 教員は転勤族。地域と学校の知的財産が乗り入れるようになれば強い地域になれるのではと思っている。
- ・ **五感を活かせば、人間強みと弱みがあり、互いに補完しあうことで学校、地域を守れる。**

岩原：徳島での取り組みは？

金井：徳島にも学校防災アドバイザーがある。20校集まったところにアドバイザーが会場に行つてアドバイスをする。

- ・ 今年は「**避難所運営と学校再開**」が議論のテーマ。
- ・ 教員には避難所運営には関わりたくない、学校が被災することを考えたくないとの人が多い。

岩原：香川県の避難所運営の現状は？

茶園：2校を例に地域と一緒にになって避難所運営のマニュアルを策定中。今年度中にまとめ、それを参考に各学校で考えてもらいたい。

岩原：患者さんと毎日命を守る活動をされている立場から、先生方の防災意識、対応は？

萩池：熱心でない方は役割通り、文面通りに動く方が多い。**百人の人が一歩前に進んだ方が救える命が多くなる。みなさんが共通の意識を持って、全員で参加することが大事。**

- ・ DMA Tの活動のクロノロ。学校の対策本部にはクロノロがほとんどなく、何時何分にどの活動が行われたかを記録した方が、漏れもわかるし課題もわかる。

岩原：地域連携 地域の方々とどういう関わり方を構築しているのか？

大熊：地域で中心になって取り組んでいるリーダーを中心に、消防とも連携、起震車の手配など一手に引き受けていただき、学校と連携して進められた。

- ・ また、見守り隊など日頃からも関わりを持っていただいている。

岩原：盲学校と地域の方々との日頃の連携は？

花崎：津波が来る地域で、月に一度防災学習をしようと熱心な地域。

- ・ 「盲学校は特別な学校である」と、80年間地域と関わりを持ってこなかった。
- ・ 今では学生数より多くの地域の方々で避難訓練に来てくれるようになった。
- ・ 高齢化した地域では出来ないことが増えてきており、地域での備蓄、助け合い体制が必要。
- ・ 生涯学習：防災学習は学校だけではなく、おじいちゃんおばあちゃんも入れての学習を。
- ・ **盲学校に行けば食料がある、助けてもらえるとなれば盲学校に足が向く。**
- ・ **高齢者も障害者も災害弱者である。**

岩原：徳島の状況は？

金井：グループホームの防災教育は：特別支援学校に通っていると教育の機会があるが、卒業した知的障害者のグループホームでの防災訓練、苦労したが何度もしていると出来るようになってきた。

- ・ 行方不明事件、ポテトチップス事件、ヘルメット事件 いろいろなことを経験しながら、それぞれの人に役割分担をし、自尊心が出来、チームワークがよくなり、ケンカが少なくなり、文

字を覚えよう、メールを打てるようになろうと、根気強く継続することで、障害のある方も自助、共助に。

岩原：毎日命を守ることに取り組んでいる方々は、命を守る防災への取り組みが行われている。学校防災アドバイザーで回って感じたことは。

萩池：学校も教育という目的に熱心に取り組んでいる。学校の目的が教育から命を守ることに目的が変わったとき、それは僕の役割ではないと言ってられない。

- ・教育現場でも会社でも、近くに専門家が居ないときにどう対処できるか、それを周りの人に広げていけば、地域全体の防災力向上につながるのでは。

岩原：質問、コメントがあれば会場から。

フロア男性①：阪神淡路大震災を経験し20年たち、今は便利さに慣れすぎている。

- ・防災、減災、次には縮災をどうするか。
- ・今の子どもたちは高齢者とつき合えていない。どのような声かけ、手伝いをしたらいいかの教育を。
- ・他人を思いやる心 今の若いうちにそのようなことを身につけたら日本の将来を助けてくれると思う。

岩原：人をおもんばかり 防災に関する指導要綱が変わったと思うが、今のご意見の様な内容が盛り込まれたと思うが。

茶園：教育委員会の立場でなければズバズバ言えるのですが・・・

- ・お年寄りにどう接すればいいのかは生活の中で身につけてきたと思う。
- ・今後も小さい頃から安全教育、心の教育を進めていくので、今しばらくお待ちください。

大熊：栗林小学校 東日本大震災で被災した栗林（くりばやし）小学校と交流をしよう。

- ・何ヶ月後に小学校の先生が来て、日常のことの積み重ねが大事と言っていた。静かに体育館に移動するとか、挨拶するとか・・・
- ・直接会いたいと6年生が来た。「寒かったけれど、みんなで一枚の毛布に足を入れ暖をとった。心が温かくなった」「3～4日お父さんに会えなかったけれど、やっと会えたときにうれしかった」と子どもたちの生の声が子どもに伝わった。
- ・毎日これを食べる、分けあって食べないといけない。そんな試食を通して1～2年生からの教育が重要になると思う。

花崎：防災訓練を地域の人と一緒にやることで、全盲の人がイスを出せる、水を出してあげられる、文化祭に来てくれるようになる。

- ・人権同和教育など動員がかかって1,200人の教員が集まるのに、なぜ防災には教員が来ていないのですか。
- ・教員一人一人が防災の大切さを認識し、フェールセーフが出来るよう「先着の上席者が現場をまとめる」こと。
- ・香川大学の教育学部や生涯教育センターの地域の教育力を知り尽くしたところを出して。

<命を守るためにしなければならないことは>

岩原：命を守るためにしなければならないことは何か？

花崎：私は足元を見ます。スニーカーを履いている先生はガラスが落ちても子どもを守れる、布の靴を履いている人は子どもを先導して守れない。

フロア男性②：1, 200人に対して住民8千人。

花崎：避難しない、避難が出来ると思っている。マンションとか無理に避難所に行かなくても。行政の負担を減らせるのでは。

フロア男性②：避難しない避難であるということは住民に知らされているのか。

花崎：自分の居るマンションには伝えているが、地域に伝えるのは行政の仕事かな。

大熊：自分ごととして考えることを、子どもに伝えたい。

- ・教職員も自分ごととするため、トランシーバーを使って臨場感を高め。
- ・地域の方にも役割を持って訓練に参加してもらうことで、子ども、教員、保護者の意識が変わる。
- ・防災参観 保護者も参加し、自分ごととして考える。

岩原：学校防災アドバイザーの成果は上がっているか？

茶園：昨年度に比べ、幼稚園では地域の方の協力を得られ、幼稚園の子どもたちが自分の命を守る行動が出来るようになっている。

- ・学校のほとんどの先生はわかっていない、真剣にやっていない。
- ・学校防災アドバイザー：「何をやったらいいかわからない」でいいのでと声かけをし、手が上がってきている学校も。
- ・防災に対する2歩目が踏み出せた学校が微増。

岩原：白木先生コメントを。

白木：今回で10回目のシンポジウム。ここ数回は防災教育の在り方を詰めてやってきた。

- ・大木さんからの指摘 中学生が今起こったように語る。その一つ一つが真剣に語られる。運転者さんの声、家族と会えたときの幸せ、あの光景が忘れられない、まさに自分ごととして意識されている
- ・この場にいる方だけでなく、広く伝えていくべきと感じた。
- ・香川大学で20年居る。放送大学で80分8駒の授業。4駒を演習、我が事として考えてもらい、中学生と同じ事を感じた。
- ・知識を講義で伝えるだけのスタイルの課題を感じた。
- ・香川県の防災力の向上が、四国の防災力の向上を担っている。
- ・みなさんで実践していきましょう。

岩原：

- ・体験が自覚になって、意識になって、行動につながっていく。
- ・防災教育が命を守ること、人を育てていくことであると感じた。

16:45~16:48 閉会挨拶 白木渡 危機管理先端教育研究センター センター長 特任教授

- ・大木先生には貴重な講演、防災教育の大切さを学んだ。
- ・5名のみなさんからそれぞれの立場から、体験に基づいた貴重なご意見をいただいた。
- ・実践されていることを住民の方、児童、大学、行政のみなさまが受け止め、我が事として考えていく機会になったのでは。
- ・引き続きこのような考える場を作っていきますので、よろしくお願いいたします。

—以上—